



会報

札幌くらぶ

2023年 2月 第100号

編集・発行/札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付

ホームページ <http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/>

会報は100号を迎えました



会報の歴史は「札幌くらぶ」の歴史そのものです。札幌にキタラが完成する、その喜びとともに2008もの座席が、特に札幌の演奏会で席が埋まらない恐怖感も覚えていた。当時の北川理事長や野村専務が気をもみ山科教授や私と相談協議の末、札幌を応援する市民活動団体「札幌くらぶ」が誕生、96年8月のことだ。300名からなる会員を擁した「札幌くらぶ」は、創刊準備号を経て翌97年1月に第一号の会報を発行した。爾来25年間、年4号発行の目標は確実に実践され、今日100号に達したことは感慨深い。

楽団の「札幌くらぶ」への期待は、定期会員の倍増にあったが「札幌くらぶ」に参集した会員の気持ちは、札幌がもっと市民の中に溶け込み「わたしの町のオケ」として親しみやすい存在に発展する期待だった。尾高さんの深い理解と応援、大平まゆみさんのリスナーを大切にする姿勢、お二人の時代と並走しながら、創刊以来「楽員のプレイヤーズトーク」を欠かさず掲載し、札幌の音を作り表現する楽員さんの実像を市民に伝え、私たちの大切な仲間だと思えるよう紙面づくりを努めてきた。多くの楽員さんが定年等で札幌を去り、また新しい仲間を迎え紙面は常に暖かく札幌の音楽を語り続けてきた。300

札幌の響きで満たされる街を求めて

札幌くらぶ会長 上田文雄

9回開催した「札幌くらぶコンサート」に現れて

いと思う。掲げたコンセプトは「札幌と遊ぶう」、大人が子ども達をキタラに連れて来て楽しむ発想である。その成功の成果が札幌市の「キタラ・ファーストコンサート」実現を導き、これまでに28万人を超える札幌の小学6年生が札幌に触れる機会を得ました。

札幌には30年前からPMFがあり、リンクアップコンサートは子ども達とオケが協奏するプログラムです。L・バースタインは89年ベルリンの壁が崩れた際に多国籍のオケを編成し第九を演奏、平和と人類の連帯を謳いあげ、翌90年札幌にPMFを創設した。オケ自体個性豊かな音色を発する多様性の承認と調和を希求する芸術です。民主主義は多様性の承認であり社会的課題を平和的に解決する人類の叡智です。PMF修

0部発行していた会報はやがてIT時代の到来で発行部数は減少したが、代わりにHomePageにしっかりとアーカイブされ、札幌を取り巻く市民側からの札幌音楽文化史の一端を占めている。「札幌くらぶ」の活動は、楽員さんの聴衆に対する見方に少なからず影響してきただろう。専門家の評論ではなく、札幌を愛するくらぶ会員との交流を通じて、札幌の音楽が一般聴衆にどう届き、何を感知何が求められているかを知る、聴衆の存在が欠かせず、聴衆の感動の心音が札幌の音楽の一部をなしている、そう感じてもらえればこそ、良質の札幌の音楽が成立すると信じた。

札幌くらぶの活動成果は、悪戦苦闘しながらも



会報「札幌くらぶ」は続きます、まだまだ、これからもっと。札幌の街が札幌の響きで満たされ、その感動が響振する街を求めて。これまでのご支援に感謝を込めながら。

了生11名が現在札幌団員として活躍し、私たちの街では札幌とPMFの素晴らしいコラボが起きています。オーケストラは人類の叡智の結晶で優れて平和的営み、私はそう思います。

2023年の新しい年が始まった。この先何度見られるか、初夢を見た。札幌が年に一度の市民向け大サービスコンサートを行っている夢だ。ベルリンフィルのヴァルトビュネ、ウィーンフィルのシェーンブルン宮殿野外音楽会？よく見るとそこは札幌の街中…美しくライトアップされた道庁赤レンガ庁舎を背景にした赤レンガプラザだ。数万人の市民が、札幌の楽員がみんな優しい眼差しと笑顔で演奏している。美しい曲が終わる、一転して伊福部昭のゴジラ基調の土俗的楽曲が強烈に、ココが北海道だぞ！と道産子の心を揺さぶり動かす渾身の演奏だ。そんな夏の一夜の出来事を、アツまた夢を見てしまった。

会報「札幌くらぶ」第100号に寄せて

「札幌くらぶサロン」は楽員の個性の紹介

札幌交響楽団事務局長 多賀 登



会報「札幌くらぶ」が100号を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。何事においても継続する、ということ

は、当団のために陰になり日向になり活動していただき、心より感謝申し上げます。さて、「札幌くらぶ」の皆様は、

なかなか大変なことで、紙面や内容の工夫など編集の方々の苦勞も如何ばかりかと推察致します。その紙面に楽団員の魅力や、札幌情報を毎号興味深く掲載して下さりありがとうございます。

さて、「札幌くらぶ」の皆様は、当団のために陰になり日向になり活動していただき、心より感謝申し上げます。

隔世の感がありますが、「札幌くらぶ」が立ち上がったとき、恥ずかしながら私はまだクラリネット首席奏者として演奏しておりました。尾高さんとベートーヴェン・シリーズを行っている年末の定期演奏会終了後に、楽団員との交流パーティーを催して下さり、上田さんに「今日の演奏会はどうでしたか？」と尋ね

られて、「メインディッシュが二品出された感じですよ」と応えて大笑いされたこと、海外ツアーで各公演を聴いて下さり、海外公演という緊張する場面にあつて、知っているお顔に接して安心感をいただいたことなどが昨日のことのように思い出されます。



で、ソロ、室内楽の活動は、オーケストラで演奏する上でもとても大切な活動と考えており感謝申し上げます。また、中学生の定期演奏会招待につきましても、クラシック音楽の裾野を将来的に広げる活動として非常に有意義で、若い人には直ぐに結果を求めず、演奏会を聴いた、という

私には今年で入団30年目を迎えます。それ以前にエキストラで初めて札幌の舞台に乗ったのが昭和63年。ベテランとはスポーツ選手同様、演奏家にとって必ずしも嬉しい称号ではないのですが(笑)、ベテランと呼ばれても抵抗できない年月が経ちま

忘れられない演奏会

チエロ奏者 荒木 均

体験や記憶がいつの日か開花すれば良いと考えております。このほか楽譜支援など、様々な協力をいただいております。これからのそのような皆様の期待に応えられる札幌を目指して参りますので、よろしくお願い致します。

拙文でお祝いに相応しいか些か疑問ではありますが、「札幌くらぶ」の更なる「発展」と、会報の益々の充実を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

会議室の外にはマスコミ各社が待ち構えている状況でした。まったく生きた心地がしなかったのを覚えています。バブル崩壊もまだ記憶に新しく、「たぐん」や山一證券が破綻してから間もない頃です。破綻という言葉が今よりずっと現実味を帯びた世相でした。

さて、忘れられない演奏会がテーマとの依頼ですが、そうした演奏会はいくつもありま

す。感銘を受けたものには、山田一雄のベートーヴェンチクルス、フルネの「海」、エッシェンバッハのベートーヴェン7番、

私には2000年に札幌に入団し、今年で23年目に入りました。初めてキタラホールで札幌を聴いたのは、尾高さん指揮、竹

私は今年で入団30年目を迎えます。それ以前にエキストラで初めて札幌の舞台に乗ったのが昭和63年。ベテランとはスポーツ選手同様、演奏家にとって必ずしも嬉しい称号ではないのですが(笑)、ベテランと呼ばれても抵抗できない年月が経ちま

12月24日、理事会から提示された削減案を受け入れるか返答する期限が迫っていました。その日は翌日の第九の練習日でしたが、ユニオンは削減案を受け入れるか決めるための臨時総会を練習後に開きました。私はユニオン書記長として経緯を楽員に説明する役を担いました。

毎年巡ってくる12月の第九を弾くたびに、その時のことを思い出します。当時を知る楽員も少なくなりましたが、私にとつては20年があつたという間でまるで昨日の出来事のようにです。ベテランとはそういうものかも知れませんね。

会報誌100号！おめでとう御座います

フアゴット奏者 夏山朋子

私は2000年に札幌に入団し、今年で23年目に入りました。初めてキタラホールで札幌を聴いたのは、尾高さん指揮、竹澤恭子さんと、メンデルスゾーン/Vn協奏曲、マラー/交響曲第5番でした。キタラホールの響きはそれは美しく、中島



公園の木々に囲まれ、こんな素晴らしいホールでいつも演奏出来るなんて札幌に入って良かった！と思いました。

入団後間もなくキララレストランでインタビュアーを受けたのを覚えています。当時、誰一人知り合いがおらず、管楽器唯一の女性奏者ということで、くらぶの皆様によく声をかけて頂きました。自主公演後のお見送りの時にも必ず顔を見て、元気にしているか？と声を掛けて下さる方々がいて、とても励みになりました。あれから20年以上経ち、古き良き札幌を牽引して下さったレジェンド奏員も卒業され、その血を受け継ぐ若い奏員達が入団し札幌も若返りました。皆プレイヤーとして、人間的にも素晴らしい、希望を持って入団した頃の自分を思い出し、私なりに今できることを！といつも勇気を貰っています。



私が札幌に入団して間もない頃、誰の紹介かは忘れませんが、故山科俊郎さんや、上田文雄さんと懇意になりました。当時は、若い団員が多く入団した時期で、本番の後などに上田さん達とのアルコール研究を通しての交流が頻繁にありました。その時の話題として「札幌と札幌を支えてくれるファンとの間をもっと近くしたい」といった話がよく出ており、私もそのとおりだと思っていました。それが具体的に進むことはなく

「札幌くらぶと共に」

打楽器奏者 大垣内英伸

と思っていたのですが、上野さんからのラブコールにより(笑)、自分の気持ちを音にのせて伝える事が自分にとってのりハビリになり、また、前向きにオケと向き合うきっかけになり、良い機会を与えてくださってとても感謝しています。これから子育てをしながら演奏活動を続ける奏員も増えま

す。もちろん独身でもバリバリ頑張っている人もいます。多種多様な状況下で、いつも良い演奏を届けようと努力する奏員をどうか温かく見守り、応援して頂けるととても嬉しいです。そして、札幌くらぶの皆さんもまだまだずっと長生きをして札幌を愛し続けて下さい。継続は力なり！

「演奏家兼主婦」が普通のこととして

ヴィオラ奏者 荒木聖子



「公務員は育休をとることを推奨されているの。」

男女雇用機会均等法だけでは成果が十分ではないことをう

会報「札幌くらぶ」創刊から100号おめでとうございます。100号発行にあたり、演奏家兼主婦として寄稿をご依頼いただいたので札幌における育児と仕事の両立について語りたと思います。

「寿退社」が当たり前だった1993年に私は札幌に入団し、2000年に第一子を出産しま

時間を共有できたことは、嬉しい記憶に残っています。私たち演奏家は、演奏を楽しんでいただける方がいないと成り立ちません。そして楽しんでいただける方が仲間となつて応援していただけることが私たちの糧となっていることは明白です。そういったことを、もつと共有できる関係に発展していけるよう今後もさらなる発展を共に祈願しています。

そこで札幌のユニオンにかけたところ、男性の多い執行部から逆に頼まれて私は育児介護休業規定の原案を作ることになってしまいました。

原案の主な内容は、演奏旅行を育児期間中に優先的にお休みしたり、夜の公演の時にキララの託児を奏員向けにも開放していただいたりといったものです。

少しの間、お客様に音をお届けできないのは残念でしたが、子供を産んだ奏員が札幌を辞めずに演奏を続けられることこそがオーケストラのためになる！との信念で、規定を作りました。

今では母親が育休を取得することが当たり前となり、多くの女性奏員が産後も札幌奏員として活躍を続けていて頼もしく感じます。

『ヴィオラ母さん』(モデルとなったヤマザキマリさんのお母さんの山崎暲子さんは元札幌のヴィオリストです。)は私たちのバイブルとなっています。

近い将来「演奏家兼主婦」が普通のこととして扱われる社会になってほしいと思います。

「札幌くらぶ」誕生の頃を想いおこして

札幌くらぶ会員 竹津香苗



私は「札幌くらぶ」誕生の頃の都合に何度か出席いたしました。その時は私は何より「札幌交響楽団」の「応援団の「誕生」を大変嬉しく思いました。

その札幌くらぶが開催している「札幌くらぶサロン」のプログラムの中で竹津が関わっていましたが、「過去の札幌定期演奏会」から札幌を聴く「札幌アーカイブス」がございました。第1回荒谷正雄指揮から始まる札幌交響楽団の音源から、「札幌くらぶサロン」に参加された皆様にお聴かせする曲を竹津は我が家で聴きながら録音をしております。その録音をしながら、そばで聴いている私に「ねえ、ママ、札幌はうまいよね、本当にうまいよねえ！」と、録音の度にくり返して申しております。私はこの時、竹津の「札幌愛」の深さを改めて思いました。本当に「純粋」に札幌を愛して札幌を大事に思っている人だったのです。

その頃の竹津の思いは「札幌」をどうにかしなければいけない、「と必死」の思いだったと思えます。私はその頃の竹津を思い、札幌応援団「札幌くらぶ」の誕生を大変嬉しく思いました。

この札幌への愛が良い音楽専用ホールが欲しい、と運動を起し「札幌コンサートホール（キタラ）」の誕生となったと思いま

す。ホールの建設運動は100円募金から始めました。

宮部光幸さんが描かれたホールイメージ図をその募金をつかいチラシを作製し、札幌三越の前で河邨文一郎先生、北大の山科俊朗先生、竹津などホール期成委員会のメンバーで市民の皆様配りました。ホール建設への啓蒙運動の始まりでした。その後パイプオルガン設置の募金運動もいたしました。キタラはホール期成委員会、札幌市民の熱意で、念願の「札幌」の「キタラ」はこうして誕生しました。「キタラ」は札幌にとっても、それを聴く皆様にとっても素晴らしいホールとなりました。

親密だったころの物語り

札幌くらぶ会員 村岡範男

札幌交響楽団の事務局に勤めておられた、渡辺悦子氏の予期せぬ訪問を受けたのは1989年冬のことである。その頃は彼



らしいホールとなりました。ホールは演奏者を育て聴く人も育てる、と竹津は申しておりましたが、素晴らしい演奏も聴く人がいないとオーケストラは成り立ちません。生の演奏に触れる機会も増やし、たくさんの人に音楽を広めていきたいとも話していました。「札幌くらぶ」の皆様は「札幌」を支え、音楽の楽しみを子ども達にも広げていく活動をしており、それは竹津も願っていたことでもございました。

学生の時以来定期演奏会には時々出かけていたものの、楽団関係者を身近に意識したのはそれが初めてであった。そうこうするうちに、僕は勤務していた大学で学生の日常生活を管轄する部署の責任ある役割を担うことになった。学生が巻き込まれる交通事故の処理などの殺伐としたわずらわしさを緩和したい一心で、何か文化的な雰囲気になれる催しができな

くもうという趣旨からである。学生、学内関係者、地域住民に開放された演奏会は、7月6日に江別市民会館で開催された。満員の盛況であった。渡辺氏と相談したうえで曲目は、歌劇「フィガロの結婚」序曲 K・486（モーツァルト）デイヴェルティメント 二長調K・136 （モーツァルト）交響詩「フィンランディア」 作品26（シベリウス）交響曲第2番二長調作品43（シベリウス）の4曲。小松一彦氏の指揮のもと、モーツァルトのあたたく満ち足りた響きとシベリウスの厳しいながらも透明な抒情が一人ひとりの聴衆に降り注いでクライマックスを迎えたとき、僕の胸は達成感で満たされた。コンクリートにしないでよかったと。参集した若若男女の表情は満足感にあふれ、その印象も長い間語り継がれたということである。今では想像がおよばないほど、大学全体が活気に満ちていた時代であったが、芸術的感動は人々の心に住み続けるということなのであろう。

女も僕も江別市大麻に住んでいたからなのだろうが、彼女の手には当時の専務・田中源一氏からの手紙と高関健氏のサイン入り指揮棒が携えられていた。前に年に1年間の留学を終え、ヨーロッパから帰国した僕が久しぶりに演奏会に出かけた折、札幌がかの地のオケとは別次元で実に几帳面に弾いていたことに感心し、新聞の投書欄に讃辞を送ったことへのお礼であった。手紙の内容は実に丁寧で熱のこもったものであった。

1990年、大学開学30周年、短大開学40周年の祝うべき年を迎えることになった。僕が所属する部署を中心に企画を考

トに予算を注ぐよりも一人ひとりの生活に潤いと思ひ出をはぐ

「PLAYER'S TALK」&「楽員さんに興味津津」の掲載一覧



札幌くらぶホームページQRコード

(高木誠一)

QRコードまたはURLからホームページに入り、掲載されている会報をご覧ください。

場しています。
「楽員さんに興味津津」に登場していただきます。

「プレイヤーズ・トーク」と「楽員さんに興味津津」に登場した楽員さんを一覽表にしました。気になる楽員さんがいましたら、このリストから探して、ホームページでもう一度その記事を読んでみてください。

「札幌くらぶ」では、これまで会報を通じて札幌の楽員さんを紹介してきました。創刊準備号から第50号までは「プレイヤーズ・トーク」として楽員さん自身の声を載せました。第51号からしばらくは「楽員さんに興味津津」と題して、インタビューを連載しています。素顔の楽員さんを知ること、親しみを持って札幌の演奏を聴くことができ、興味が尽きることはありません。そこで、これまでに

「Player's talk (プレイヤーズ・トーク)」

掲載号	No.	楽員名(敬称略)	演奏楽器
創刊準備号	1	土田英順	チェロ
創刊号	2	大垣内英伸	ティンパニ、打楽器
第2号	3	田中 徹	トロンボーン
第3号	4	水谷正志	ヴァイオリン
第4号	5	田中正樹	(ライブラリアン)
	6	松本了英	(ステージスタッフ)
第5号	7	北市勝年	チェロ
第6号	8	森 圭吾	フルート
	9	山下暁子	ヴァイオリン
第7号	10	岩崎弘昌	オーボエ
	11	桜庭茂樹	チェロ
第8号	12	高橋 敏	ファゴット
	13	斎藤正樹	コントラバス
第9号	14	多賀 登	クラリネット
	15	荒木聖子	ヴァイオリン
第10号	16	橋本 敦	ホルン
	17	角野友則	チェロ
第11号	-	-	-
第12号	18	松原悠人	フルート
	19	石突美奈	ヴァイオリン
第13号	20	香川千楯	チューバ
	21	川崎昌子	チェロ
第14号	22	松田次史	トランペット
	23	河邊俊和	ヴァイオリン
第15号	24	馬場順子	ヴァイオリン
	25	荒木 均	チェロ
第16号	26	廣狩 亮	ヴァイオリン
第17号	27	三原豊彦	ヴァイオリン
	28	三原愛彦	ヴァイオリン
第18号	29	金子義人	トランペット
	30	吉岡幹雄	ティンパニ、打楽器
第19号	31	藤沢光雄	コントラバス
	32	夏山朋子	ファゴット
第20号	33	井上澄子	ヴァイオリン
	34	島方晴康	ホルン
第21号	35	高井 明	オーボエ
	36	石川希峰	ヴァイオリン
第22号	37	高橋聖純	フルート
	38	坂菜々子	チェロ
第23号	39	野口隆信	バストロンボーン
	40	土井 奏	ヴァイオリン
第24号	41	三瓶佳紀	クラリネット
	42	ディバスクアーレ ウィンチェンツォ	ヴァイオリン
第25号	43	佐藤 誠	トランペット
	44	辻 彩子	ヴァイオリン

掲載号	No.	楽員名(敬称略)	演奏楽器
第26号	45	菅野 猛	ホルン
	46	信田尚三	コントラバス
第27号	47	助川 龍	コントラバス
	48	渡部大三郎	クラリネット
第28号	49	橋本純一郎	ヴァイオリン
	50	橋本幸子	ヴァイオリン
第29号	51	佐藤郁子	ヴァイオリン
	52	玉木亮一	チューバ
第30号	53	福井岳雄	ヴァイオリン
	54	宮城完爾	オーボエ
第31号	55	清水国雄	フルート
	56	鹿島祥湖	ヴァイオリン
第32号	57	石原ゆかり	ヴァイオリン
	58	藤原靖久	ティンパニ、打楽器
第33号	59	福田善亮	トランペット
	60	石川祐支	チェロ
第34号	61	村上 敦	ファゴット
	62	多賀万純	ヴァイオリン
第35号	63	佐々木倫子	ヴァイオリン
第36号	64	武藤厚志	ティンパニ、打楽器
	65	遠藤幸男	ヴァイオリン
第37号	-	-	-
第38号	66	大森潤子	ヴァイオリン
第39号	67	前川和弘	トランペット
	68	織田美貴子	ヴァイオリン
第40号	69	山下友輔	トロンボーン
第41号	70	鈴木純子	ヴァイオリン
	71	鹿島祥湖	ヴァイオリン
第42号	72	一戸 哲	ファゴット
	73	富樫 耕	ヴァイオリン
第43号	74	市川雅敏	ホルン
	75	小笠原優子	ヴァイオリン
第44号	76	物部憲一	ヴァイオリン
	77	余田安広	トロンボーン
第45号	78	廣狩理栄	チェロ
	79	坂口 聡	ファゴット
第46号	80	横井慎吾	ヴァイオリン
	81	真貝裕司	ティンパニ、打楽器
第47号	82	文屋治実	チェロ
	83	山崎 衆	フルート
第48号	84	水戸英典	ヴァイオリン
	85	折笠和樹	ホルン
第49号	86	坪田 亮	チェロ
	87	岩佐朋彦	ホルン
第50号	88	小峰航一	ヴァイオリン
	89	中村菜見子	ヴァイオリン

「楽員さんに興味津津」

掲載号	No.	楽員名(敬称略)	演奏楽器	入団年
第66号	1	青木晃一	ヴァイオリン	2012
第67号	2	武田芽衣	チェロ	2009
第68号	3	中野耕太郎	トロンボーン	2010
第69号	4	小林美和子	ヴァイオリン	2008
第70号	5	白子正樹	クラリネット	2011
第71号	6	猿渡 輔	チェロ	2008
第72号	7	山田圭祐	ホルン	2014
第73号	8	田島高宏	コンサートマスター	2014
第74号	9	大家和樹	ティンパニ、打楽器	2011
第75号	10	富田麻衣子	ヴァイオリン	2008
第76号	11	岡部亜希子	ヴァイオリン	2008
第77号	12	稲橋賢二	コントラバス	2012
第78号	13	竹中遙加	ヴァイオリン	2011
第79号	14	入川 奨	ティンパニ、打楽器	2017
第80号	15	多川智子	ヴァイオリン	2008
第81号	16	野津雄太	フルート	2015
第82号	17	高木優樹	ヴァイオリン	2014
第83号	18	小野木遼	チェロ	2015
第84号	19	熊谷勇大	ヴァイオリン	2015
第85号	20	飯村真理	ヴァイオリン	2015
第86号	21	関美矢子	オーボエ	2016
第87号	22	吉田聖也	コントラバス	2017
第88号	23	鈴木勇人	ヴァイオリン	2016
第89号	24	鶴田麻記	トランペット	2018
第90号	-	-	-	-
第91号	-	-	-	-
第92号	-	-	-	-
第93号	25	赤間さゆら	ヴァイオリン	2018
第94号	26	桐原宗生	ヴァイオリン	2019
第94号	27	土谷 瞳	ホルン	2019
第95号	28	小林昌平	トランペット	2019
第96号	29	樋本朱音	ヴァイオリン	2019
第97号	30	下川 朗	コントラバス	2020
第98号	31	鶴野紘之	ヴァイオリン	2020
第99号	32	福島さゆり	フルート	2021
第100号	33	澤山雄介	トロンボーン	2020

その他のインタビュー (敬称略)

第13号	グレブ・ニキティン	コンサートマスター
第22号	田島高宏	コンサートマスター
第27号	大平(菅野)まゆみ	コンサートマスター
第34号	大平(菅野)まゆみ	コンサートマスター
第36号	伊藤遼太郎	コンサートマスター
第39号	石川祐支	チェロ(首席)
第42号	三上 亮	コンサートマスター
第78号	中村大志	(ライブラリアン)

会報「札幌くらぶ」の歴史

会報「札幌くらぶ」の創刊

「札幌友の会」の設立を協議していた1995(平成7)年9月6日の準備会で、入会勧誘のためのパンフレットをつくるこ



と、これが「友の会」会報の第1号であってもよいのではないかと協議され、会報を作成することが決定し、これが会報「札幌くらぶ」の創刊の始まりであり、1996(平成8)年6月に入会勧誘のためのパンフレットを兼ねる札幌友の会会報「札幌くらぶ」の創刊準備号が発行された。

月会報第1号となる会報「札幌くらぶ」創刊号を発行、以後会報「札幌くらぶ」は札幌くらぶの定期刊行物として、年3〜4回発行されることになった。連載66回を数えた「札幌物語」は創刊

準備号から始まり、また、「楽員さん」に衣替えした「プレイヤーズ」。

札幌交響楽団楽員名鑑の発行

2000(平成12)年1月発行した第11号の別冊として楽員一人ひとりの写真を掲載した

「札幌交響楽団楽員名鑑」を作成した。楽員名鑑には①出生地、②入団年、③誕生日の星



第11号別冊札幌交響楽団楽員名鑑

座、④趣味、⑤何か一言の項目について楽員から提供を受けて掲載

にわたり続けてきた紙面の体裁を、会報編集長交代を期に横3段組に変更するとともに、会員の寄稿、演奏会の感想の寄稿、札幌くらぶの活動状況などを重視する紙面編成に一新して、独自色を打ち出した。その後、後述を

しているが2011(平成23)年3月発行の第53号から縦書き移行と2016(平成28)年7月発行の第75号からカラー



縦組みとなった会報第53号

以降は横2段組を、1999(平成11)年1月発行の第7号から2007(平成19)年12月発行の第41号まで2段を

創刊以来11年間創刊以来11年間創刊以来11年間

2011(平成23)年1月発行の第53号から、かねてより読みやすい会報を目指して検討していた会報「札幌くらぶ」の縦書き化を実現し、横書きから紙面のレイアウトを一新した。



横3段組の会報第41号

紙面組体裁の更

紙面組体裁の更

また、これまで印刷を依頼していた協業組合高速印刷センターとのつながりが切れてしまったため、Wordによる完全レイアウト原稿を作成することにより価格を押さえることを条件に新たに富士プリント株式会社



横2段組の会報第7号

載し、好評を博し、改訂版の作成を企画して札幌に協力を呼び掛けたが、個人情報

2010(平成22)年3月、会報編集長に欠員が生じたことにより、引き継ぎもままならず、また、後任が決まらないことから会報の編集作業は滞り、後任の会報編集長を引き受けるスタッフも現れず、事務局長が編集担当として、2、3名のスタッフと共同でつなぎで臨時的に編集業務を行うことになったことから、これまで指揮者、コンサート

また、これまで印刷を依頼していた協業組合高速印刷センターとのつながりが切れてしまったため、Wordによる完全レイアウト原稿を作成することにより価格を押さえることを条件に新たに富士プリント株式会社

印刷に変更している。

プレイヤーズトック及びインタビュー記事の休載

記事が少ないと感じていたことから自分たちで記事が作れるものを考え、スタッフの活動を伝える「スタッフの活動報告」を新たに連載することとし、2010(平成22)年3月に新体制で第50号を発行することができた。

縦書き移行と「演奏会を楽しく聴くために」の連載を開始

2011(平成23)年1月発行の第53号から、かねてより読みやすい会報を目指して検討していた会報「札幌くらぶ」の縦書き化を実現し、横書きから紙面のレイアウトを一新した。

「スタッフの活動報告」の掲載を開始

臨時に会報編集を行っているスタッフは、札幌くらぶ関連の

11(平成23)年4月第54号からスタートした。

「随想 本棚の隅から」の連載を開始

運営スタッフの井上明子さんがこれまで聴いてきたほとんどの演奏会のプログラムを保存しており、そのプログラムをアトラダムに取り出して、その演奏会を思い出し回想して執筆した「随想 本棚の隅から」の連載を2012(平成24)10月発行の第60号から開始した。

「プレイヤーズ・トーク」は「楽員さんに興味津津」として復活

2010(平成22)年3月発行の第50号で編集担当の問題で休載となっていたインタビュー記事「プレイヤーズ・トーク」を復活させようと井上明子会報編集スタッフが主体となつて復活させようと企画し、インタビュー1人について2ページとなる企画案が提出され、運営会議にてページ数が多すぎるなど賛否両論の協議の末、企画どおり1人について2ページで掲載することを獲得し、装いを新たに「楽員さんに興味津津」と改称して2014(平成26)4月発行の第66号から連載を開始した。これにより「演奏会を楽しく聴くために」と2つの連載記事

でそれぞれ2ページずつ配分されることにより、4ページが固定され、自由な編集ができるページは4ページとなったが、その分、記事収集など編集作業はスムーズに行えるようになった。

カラー化の実現

かねてより検討していたカラー印刷化について、これまで印刷を依頼していた富士プリント株式会社や札幌市内の印刷会社から仕様や印刷見積金額をもとに協議していたが、予算的に厳しい金額となっていたため、地場印刷会社への発注ではカラー化の実現が難しいと判断し、仙台ファイルハーモニークラブの会報「FILE HARVEY CLUB」や同クラブの「ファンクラブレポート」、石川県立音楽堂学友会の会報「楽友会だより」など、すでにカラー化していたファンクラブの会報の情報を参考に、Net印刷での作成を検討、金額はとも似たり寄ったりだったがデータがWordでも可能であること(今はPDFのみとなつて

いる)、印刷代金の支払方法が納品後の請求書での支払いができることなどの条件でネット印刷会社ラクスルが最適であると判断し、Net印刷に切り替えることに決定し、2016(平成



カラ一化した会報第75号

28)7月発行の第75号からカラー化を実現することができた。予算的にもモノクロ印刷のときの金額から約3分の1程度の金額に圧縮が可能となり、大幅に印刷経費を節約することができた。

Net印刷は、発注や校正などすべての業務はネット上で行われ、発注者と印刷会社はお互いに顔を合わせることなく業務を進めることができ、当初はWordの機能を駆使した完全レイアウトで作成した原稿データを送信し、ラクスルでPDFに変換したデータが札幌くらぶに送信され、それを確認していたが、後にPDFデータに変換した原稿を送信することに変更になった。これまでWordの機能を駆使して完全レイアウトを作成していた関係で、このWordデータからPDFデータに変換することは特別なソフトを必要とすることなくWordそのものが持っている機能を活用

することで変換することができ、ラクスルに送信するPDFデータは完全レイアウト原稿を作成する経験を生かして簡単に作成することができた。

新型コロナウイルス感染症禍の会報

2020(令和2)年1月に国内で初めて確認された新型コロナウイルス感染症(コロナ)は、2月に札幌でも確認され感染が徐々に拡大してきて、7月には感染者数がピークとなつてきたが、それまでに札幌は定期演奏会をはじめ多くの演奏会が中止されたためインタビューをすることが記事作成の前提となつていた

「楽員さんに興味津津」はインタビューができなくなり、この年の9月発行の第90号からやむなく休載することになった。また、札幌の演奏会が中止となることが続いて解説する定期演奏会を楽しく聴くために「演奏会を楽しく聴くために」も休載することなどで、この年9月

発行の第90号は4ページ、11月発行の第91号は6ページ、2021(令和3)年2月発行の第92号4ページと減ページして発行せざるを得なかった。コロナ禍の影響は札幌くらぶの活動自体にも及ぼし活動を制限せざるを得なくなり、活動は運営会議や札幌市内中学校札幌定期演奏会招待事業など毎月できた活動も延期や中止・停滞し、このため「運営スタッフの活動報告」も同号から掲載を取りやめることになった。

連載記事の復活

コロナの感染者が減少したことにより札幌の演奏会は名曲シリーズや定期演奏会を感染対策を実施して徐々に再開されるようになり、会報「札幌くらぶ」2021(令和3)年2月発行の第92号から「演奏会を楽しく聴くために」を、「楽員さんに興味津津」はインタビューをしないので再開する方を模索した結果、執筆項目や字数を指定して楽員に執筆を依頼する方法であれば、連絡もメールや電話でできることから、これを受け入れてもらえる楽員から同年5月発行の第93号から再開することができた。

コロナ禍で休載となつた連載記事は「運営スタッフの活動報

告」を除き再開することができたが、運営スタッフの活動も徐々に戻つて、2022(令和4)年11月発行の第99号から「運営スタッフの活動報告」も復活したのである。

「僕の変聴盤」の連載開始

我々音楽ファンにとつて、生演奏に触れるのはこの上ない喜びですが、CDなどを通じて様々な演奏を聴くこともまた楽しいことです。

そこで、会員の村岡範男さんは演奏会を聴く前にCDを50枚ほど聴いてから演奏会に出かけるほど多くのCDを所有されているとのことで、これまでも「放言」と称する随想をスタッフに配信してきました。

そのCDのなかから特にお気に入りな「僕の変聴盤」と題して、2022(令和4)5月発行の第97号から「お薦め」の名盤を紹介する連載を開始した。

会報編集担当者の変遷

- 和田雅之…：創刊号〜第5号
- 佐藤良次…：第6号〜第40号
- 松尾英樹…：第41号〜第50号
- 武藤義典…：第51号〜第75号
- 中居志津子…

- 第76号〜第83号
- 村山英朗…：第84号〜現在
- (副会長 武藤義典)

「札幌と黒澤監督」(第6号)再掲載

札幌物語 VII

札幌と黒澤監督



去る9月6日に映画監督の黒澤明氏が亡くなりました。1985年に封切られた映画「乱」は黒澤明監督が心血を注いで作られた作品であり、その音楽は故武満徹氏が作曲し、札幌交響楽団が演奏しました。各方面からお問い合わせがありましたので、本号ではその時の模様の一部をお伝えします。

「乱」の総制作費は約80億円程とか聞いています。日本では資金が集まり切らなくて、フランスやイギリスなどからも資金提供を受けた国際的な映画作品でした。

一般的に映画の音楽は、作曲家が予め映画監督からストーリーと監督手書きの絵コンテを受け取ってイメージ作りや音作りの準備をするそうで、「乱」の場合も、予め絵コンテなどを受け取ってイメージ作りをしたそうですが、本格的に作曲に取り掛かったのは、前年の10月に出来たラッシュ（未編集の試写用映画フィルム）を見てからの5か月間だったそうです。武満さんが千歳へ音入れに来られた時にはくたくたにくたびれていらっしかったです。

作曲が進むと同時に演奏者が問題になり、指揮者とオーケストラについて連日議論されたそうです。

指揮者は岩城宏之氏に決まり、オーケストラはロンドン交響楽団と当時岩城宏之氏が音楽監督を務めていた札幌交響楽団が候補に挙がったのだそうです。

黒澤監督からは国際的な映画なのでオーケストラはロンドン交響楽団にしたい、と強いご希望があり、北海道の札幌交響楽団が候補に挙がったことが既にご不満だったようです。

オーケストラは武満さんの強いご希望で札幌交響楽団に決まりました。岩城・札幌は武満さんの音楽を数多く初演していて、お互いに信頼関係がありました。

札幌の出演については、84年の11月頃打診が有りました。電話を受けた私が、つつい「ご冗談を」と言ってしまった程、突然降って湧いたビッグな話だったのです。「実はマジなのです」と言われて、大車輪で実現出来るよう準備を始めました。

スケジュールは85年の4月5日から7日まで

札幌交響楽団では前後1日ずつ予備日まで用意しました。

録音に使うホールはオープンして間の無い千歳市民文化センターに無理をお願いして用意して頂きました。当時の北海道では最も音響の良いい、しかも、外部からの雑音に対する遮音度のレベルが高いホールで、頭の上を飛ぶジェット戦闘機の音も遮れるように出来ていたのです。今日でも遮音の良さは恐らく日本一のホールでしょう。こうして万全の準備をして、録音の初日を迎えました。

録音の技術者は東京の「葵スタジオ」から24チャンネルのテープレコーダー、高速ビデオに落とし込んだ映像を100分の1秒単位で同調録音するための複雑な機材をトラックに積み込んで来て、前日から会場のセッティングをしました。

4月5日午前9時25分、黒澤明監督は黒澤一家と呼ばれる大勢のスタッフを従えて現れました。楽団に挨拶する気はさらさら無く、ふい、と調整室に入りかけました。さすがに、とりまきの人が気を遣って「かんとく、一言」と促され、黒澤さんは途中から引き返して指揮台に上り「8年かけて作った映画です。よろしく…」と一言、ろくに楽団員の顔も見ないで再び調整室に入り、どっかと椅子にかけてたばこを吞えました。ちょっと迫力のあるシーンでした。

舞台にいる札幌の楽団員、岩城さん、黒澤監督の後から調整室に入った武満さん、みんな暫くしゅんとなりました。

私は立場上、黒澤監督への挨拶のため、武満さんの後にくっついて調整室に入りました。挨拶をしてホールへ引き返そうとしたら「竹津さん、ここにいてよ」と、か細い声で武満さんに呼び止められました。

楽屋2つをぶち抜いた調整室には高速ビデオを映す装置と隣にでんと大きな24チャンネルのテープレコーダー、両脇に大きなスピーカー、手前に有る大きな調整卓には「葵スタジオ」から来たミキサーが座り、少し後ろの左に黒澤監督、右に武満さんの椅子が置いてありました。そして、何故か、助手の人がこの2人の間に私のための椅子を置いてくれたのです。仕方なく、

気まずい2人の間に割って入る格好になりました。

黒澤監督の天皇振りは見事なものでした。私たち4人以外には影も形も見えない、気配も感じられないのに、チェーンソーの黒澤監督がたばこを唾える度に何処からともなく火が飛んできて、灰が落ちそうになると灰皿が出て来る、と言う具合でした。監督はその間振り向きもしないで、ブラウン管をにらみながらスピーカーから流れて来る音楽に耳を傾けていました。

黒澤監督は自作の映画には、音楽にもご自分の強いイメージをお持ちで、武満さんには次々と注文をつけられました。武満さんは自分の音楽と監督の要求の狭間でストレスが溜まり益々消耗しました。一方、黒澤監督は段々と顔に血が上り気力が充実して来るようでした。

初日の午前中をかけて、やっと一つの場面の音入れが終了しました。この音楽の寸法はわずかに4分50秒程度です。この音楽を実に40回程演奏しました。ビデオテープとの同調で監督の意図する音楽の頂点が30分の1秒程合わないための録り直しでした。岩城さんは同じ曲をメトロノームも無しにこれだけ多くの回数指揮しても前後に1秒以内しか違わない、と言う天才的なテンポ感覚の持ち主で、ミキサーがまずそれに驚いて、更に、それだけの回数同じ曲を演奏しても集中力を失わない札響の演奏に監督は引

き込まれるようにスピーカーの方に身を乗りだして来ました。

武満さんは前年10月からの根を詰めた仕事でくたくたの上に、録音中に次々に出される要求で初日の午前中に既に精も根も使い果たし「今晚は何か精のつくものを食べさせて」と小声で私に助けを求められ「スッポンでも食べに行きますか」と小声でお答えしたものです。

プレイバックのためにちょっと途切れた時、監督は「ちょっと」と声を出されました。スタッフが何事かとすっ飛んで来ました。監督の口から出た言葉は「今晚はスッポン料理」でした。

午前中の音入れは終わりました。モニター・スピーカーで、調整室からミキサーが「OKです。ご苦労さまでした。昼食にしてください」と、ステージからは助手が「オーケストラ解散します」とその時、黒澤監督は大きな声で「ちょっと解散を待って」といきなり調整室から駆け出してステージへ向かい、指揮台に駆け上がり、深々と頭を下げて「みなさんありがとう、千歳まで来て良かったです」としばらく顔を上げられませんでした。

初日が終わって、岩城さん武満さんと黒澤一家のスタッフ全員で、千歳市内のスッポン料理店の2階に上がり、全員がバンチュウで乾杯しました。

ご冥福をお祈りします。

(竹津宜男)

「札響と黒澤監督」再掲載について

ここに再掲載した札響物語「札響と黒澤監督」は、1998年10月発行の会報第6号に掲載されたものです。黒澤明監督が亡くなられてから25年が経過し、近年その人柄についてよくよく語られるようになりまし

た。また映画「乱」の音楽を手掛けた武満徹の数々の作品は、今や世界中で演奏されています。私はその「乱」の音楽(組曲)を3年前、札響の演奏で実際に聴く機会に恵まれました。重厚なティンパニを耳にして思い出したのが、黒澤監督が要求したティンパニをめぐって武満さんと口論になったという逸話です。(武満サウンドはティンパニを用いないのが常です。)一方で武満さんは、録音を札響で行うことを切望して譲りませんでした。

そして迎えたその録音の日の様子がこの「札響と黒澤監督」に詳しく書かれています。重苦しい空気に包まれ、妥協を許さない巨匠二人の間に挟まれた、指揮者の岩城宏之と札響事務局長の竹津宜男氏の緊迫感が伝わってきます。このような状況の中で岩城さんと札響は完璧にミッ

ションを成し遂げました。黒澤監督がその演奏を聴いて感服し、楽員に頭を下げたという落ちに思わず苦笑しました。(札響の「乱」組曲は、尾高忠明指揮のCD・英国シヤンドス盤で聴くことができます。)

本誌面に竹津さんが書き残した「札響と黒澤監督」を再掲載しましたのは、黒澤明監督と武満徹の人柄を知るうえで、大変貴重な資料であると考えたからに他なりません。このような価値

会報「札響くらぶ」第50号

会報「札響くらぶ」第100号発行にあたって、その半分となる第50号は2010(平成22)年3月に発行されましたが、1996年6月発行の創刊準備号から13年9か月が経過しての達成で、その第50号のお祝いの記事はどうだったか振り返ってみました。

特集号としてはモノクロ印刷の関係もあり少し地味な感じですが、1ページには上田会長が札幌市長の職にあり、当時としては色々な話が出ていたこともあり、西川副会長が代わって祝いのコメントを寄せられ、2、3ページには創設準備会から参加している川村喜芳さん、創立会員の鈴木重統さん、創立当初

ある資料がわが「札響くらぶ」の会報に掲載されていたことに驚くとともに誇らしさを感じております。

4人の偉大な芸術家(侍)は既に他界しておりますが、会報100号を記念して、札響をこよなく愛し、札響くらぶの創立にご尽力くださいました竹津宜男氏を偲んで、皆様とともに読み返してみたいと思っております。

(事務局長 高木誠一)

から札響事務局にありながら札響くらぶの事務を手伝い支えていただいた渡辺悦子さん、楽員から打楽器奏者の大垣内英伸さん、トランペット奏者の前川和弘さんがコメントを寄せられて掲載しています。

また、この号にも尾高音楽監督と高関正指揮者による札響定期演奏会の解説を座談会形式で掲載されていますが、尾高音楽監督は第42号から年度ごとの定期演奏会のテーマと聴きどころの解説を札響音楽監督を退任するまで欠かさず続けていただいております。足跡を刻まれています。

(副会長 武藤義典)

3月～5月 定期演奏会 E.Tanumiシリーズ定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三 (札幌くらぶ顧問)

第651回定期演奏会

3月4日(土) 17:00

5日(日) 13:00

指揮 尾高忠明

ヴァイオリン 金川真弓

■エルガー

序曲「南国にて」

エルガーが夫人を伴ってイタリア旅行をおこなった折、アラッソ付近を散策していると、その美しい情景を背景に一人の羊飼いが古い廃墟のそばに佇んでいるのを見つけた。エルガーは、この場所がかつて軍隊が激しく闘った古戦場であったことを想起しながら、この曲の楽想が沸き上がったと語っている。快活で勇壮な主題からはじまるこの演奏会用序曲は、地中海的風景を呼び起こす響きの後、中間部で羊飼いを思い浮かべるようなヴァイオラの独奏が民謡風な



金川真弓 © Kaupo Kikkas

旋律を静かに奏で、ホルンや木管楽器がそれを受け継ぎながら壮麗な終結部へと進む。

■プロコフィエフ

ヴァイオリン協奏曲第1番

第1楽章冒頭からヴァイオリン独奏の耽美な旋律が、聴き手をいきなり惹きつける。楽譜には「夢見るように」と指示が記載されており、その後屈折した音型や重音の激しいピツィカートが変化のある楽想を展開させていく。この曲は、ロシア革命勃発の年に完成したため、初演は作曲者が日本を経由してアメリカに亡命してからであった。モダニズムとロマンティズムが奇



© Martin Richardson 尾高忠明

あった。モダニズムとロマンティズムが奇

跡的に合致した作曲家にとっても特異な作品と言える。

■ラフマニノフ

交響的舞曲

晩年のラフマニノフは、戦争の危機を避け、ロング・アイランドに別荘を借り、一見平穏な生

E.Tanumiシリーズ定期演奏会

第12回

3月9日(木) 19:00

指揮 鈴木雅明

■矢代秋雄

交響曲

矢代が没して半世紀近い歳月が流れた。彼のあまりにも早い死が報じられた時の驚きは、今も鮮明に覚えている。矢代は寡作であったが、作品内容は知的で実に完成度が高い。交響曲は、第1楽章から夢幻な弦の響き、

重厚な金管の重なり、そして木管やハープによる静謐な管弦楽法が循環主題を伴って聴き手に迫ってくる。第2楽章の「お神楽」から導かれた特徴的なリズムの反復が、躍動感を際立たせ、

活をおくっていた。しかし、ナチス・ドイツ軍がロシアにまで侵攻する勢いに心労は重なっていた。そんな時期に最後の力を振り絞り書き上げたのがこの作品である。朝の9時から夜の11時まで作曲に没頭し、1940年の夏ごろにはオーケストレーションに取りかかっている。はじめは「幻想的舞曲」という題名が考えられ3つの楽章には「正午」「夕べ」「深夜」の副題も与えようとしていたらしい。



鈴木雅明 © Marco Borggreve

「その標題は主観的なもので、私はこの曲を頭の中で作曲しながら、しばしば涙を流した」とい

E.Tanumiシリーズ定期演奏会

第13回

4月11日(火) 19:00

指揮 大植英次

ピアノ アンドレイ・ガヴリーロフ

■嵯場富美子

広島レクイエム

広島市出身の嵯場は、幼いときから原爆の惨状を聞いて育った。東京芸術大学作曲科に入学した彼女は、芸大大学院修了直後の1979年に弦楽のための「広島レクイエム」を作曲。その後この曲は、1985年にパーンスタインの推薦で、大植英次指揮による「広島平和コンサート」で初演された。

曲の前半部分は、原爆で傷つき死んでいった人々のうめき、悲しみを表しており、曲の後半部分は、その人々が苦しみからのがれて、神の元へ赴き、神のひざもとでやすらかに眠れるようにとの祈りである。

■ラフマニノフ

ピアノ協奏曲第2番

ラフマニノフは、幼少期豊かな森と美しい湖のあるノヴゴロドで過ごし、そこで夜ごと教会の



大植英次

© 飯島隆



鐘の響きで感性をふくらませたという。彼の作品の中でも最も有名なこの曲は第1楽章の冒頭で、重い鐘の和音がピアノにより奏でられ、哀愁に満ちた濃厚な旋律がとうとうと流れ出す。純愛映画の背景にぴったりの甘い名旋律を聴くと、若かりし日の青春のときめきが蘇ってくるようだ。

■シヨスタコーヴィチ

交響曲第5番

時の政治体制に翻弄された芸術家は古今東西実多いが、シヨスタコーヴィチもその代表例だろう。彼は1936年にソ連共産党の機関誌「フラウダ」でオペラ「ムツェンスク郡のマクベス夫人」が、「西欧かぶれのした形式主義的な作品」との烙印を押され、その頃書いた進歩的な交響曲第4番を取り下げていた。そして、厳しい批判に耐える形で作曲されたのが交響曲第5番。この曲は「苦悩から歓喜へ」という明快な構成により初演は大成功を収め、名誉回復を果た

川瀬賢太郎



©Yoshinori Kurosawa

も興味深い。

した。しかし、それから40年あまり経って「シヨスタコーヴィチの証言」が出版され、「あの曲は強制された歓喜で、これが一体どんな礼賛だというのか。それが聞き取れないとは、耳がないのも同然だ」と書かれている。この証言は、恐らく偽書だという評価が定着しつつあるものの単に体制におもねった作品では無いはずだ。

第652回定期演奏会

4月22日(土) 17:00
23日(日) 13:00
指揮 川瀬賢太郎
ピアノ オリ・ムストネン

■ムソルグスキー

「シヨスタコーヴィチ編」

「ホヴァンシチナ」前奏曲

ムソルグスキーが未完のまま遺したオペラ「ホヴァンシチナ」を、作曲者の朋友リムスキー＝コルサコフが上演できるように尽力したスコアと、シヨスタコーヴィチが原典を見直し、作曲家の意図に近づけるようにまとめ直した新しい版とが存在す



オリ・ムストネン ©Heikki Tuuli

る。今回は、後者の版による前奏曲「モスクワ川の夜明け」の演奏である。

■プロコフィエフ

ピアノ協奏曲第3番

プロコフィエフは1918年に日本を經由しアメリカにわたり、さらにパリでも西洋のモダンニズムの音楽に接している。しかし、自分の作品には現代音楽的な前衛技法を取り入れようとはせず、前衛的ではない祖国の聴衆に向けての作品を多く作曲した。「ピアノ協奏曲第3番」は、アメリカに活動の場をさだめたころに書かれている。プロコフィエフは、5曲のピアノ協奏曲を書いたが、第3番は特に有名

■ラフマニノフ

交響曲第2番

交響曲第1番が不評に終わった中、ラフマニノフは神経衰弱を克服しながら、ピアノ協奏曲第2番でグリムカ賞を勝ち取り成功を収める。自信を持ちながらつくり上げたこの曲は、彼の3つの交響曲中、もっとも広く親しまれるようになった名曲

第653回定期演奏会

5月27日(土) 17:00
28日(日) 13:00
指揮 マティヤス・バーメルト
独唱 吉田珠代(ソプラノ)
甲斐栄次郎(バリトン)
合唱 札幌合唱団ほか

■メンデルスゾーン

「真夏の夜の夢」序曲、夜想曲

「ご存じシェイクスピアのこの戯曲は、聖ヨハネ祭の前夜における不思議な物語だ。17歳のメンデルスゾーンは、この理想的な戯曲を読み感銘を受けて、一

だ。全体的にラフマニノフ特有のロシア音楽が濃厚に感じられ、美しい旋律がうねるように展開し、ロマン性に満ち溢れている。第3楽章のクラリネットのメランコリーな音色を聴くと涙腺がゆるんでしまいそうになるのは、筆者だけではないだろう。

息に序曲を書き上げた。それから17年後、ロシア国王から同戯曲の劇中音楽を書くように命じられ、12曲が作曲されたが、青年時代に書かれた序曲に比べ内容的に少しも変化していなかった。それは彼が若くして天才だったことの証しでもある。「夜想曲」は二組の恋人たちが森の中で眠る情景で奏でられ、ホルンのロマンティックな調べが実に印象的だ。

■ブラームス

「ドイツ・レクイエム」

愛する人との永遠の別れに誰もが、強い衝撃と感情の根元に関わる深い悲しみに遭遇する。この衝撃と悲しみを癒し、慰める音楽をブラームスは書いた。このレクイエムは、カトリック教

吉田珠代



甲斐栄次郎



会の「死者のためのミサ」とは立場を異にし、また、ドイツ語によるドイツ人のための鎮魂歌というためだけではなく、悲しんでいる全ての人類のためのレクイエムという思想に至っている。曲は完成までに十年以上の年月を要した。その間、師シューマンの死や母親の死に遭遇しながら、他の作品からの転用や中断を挟み、1869年にライプツィヒで全曲が演奏された。この曲は、ブラームスらしい練達した合唱の書法や深い響きによる効果的な管弦楽法が駆使され、構成も第4楽章を軸とした全7楽章がシメトリカルな美しさを構築している。作曲者の情熱と豊麗なロマンティシズムが全楽章を通してじつくりと味わうことができるだろう。

(写真協力 札幌交響楽団)

楽員さんに興味津津

③

さわやま ゆうすけ

バスロンボーン奏者

澤山雄介さんに聞く

♪ 一番大きい音でコンバート

横浜市の出身です。横浜の金沢八景という所で幼少期から大卒卒業までを過ごしました。海が近く、潮風が心地よいとても過ごしやすい土地です。幼稚園、小、中学生の頃はとにかく体を動かすことが好きで、学校の休み時間にはよく友達とバスケットボールをして遊んでいました。幼稚園から中学に上がるまでは地元のスポーツ

クラブにも通っており、運動には自信がありました(今は…絶望的です)。

バスロンボーンを始めたのは高校1年生の時です。元々は小学校5年生の時からトロンボーン(テナートロンボーン)を吹いていたのですが、高校1年時の吹奏楽コンクールで、普段バスロンボーンを吹いている先輩が学校の海外研修で不在だったため、パート内で一番大きい音が出たという理由で私がコンバートされました。バスロン

ボーンを吹き始めた頃はこの楽器にあまり魅力を感じておらず、メロディーやソロを担当することの多いテナートロンボーンに早く戻りたいなとずっと思っていました。それでも続けて吹いているうちにハーモニーでは主に主音を担当出来たり、マーチやワルツでは頭打ち(1拍目)を担当出来ることの楽しさや、何よりもこの楽器の持つ深

くて温かい音色に魅了されてきました。

♪ 大忙しの大学4年間

出身大学は洗足学園音楽大学です。管楽器専攻の人数が他の

大学に比べて多いことで有名です。私が在学した時は、トロンボ

ーンは4学年合わせて50名ほど在籍していました。その中でバスロンボーン専攻の人数は約4、5名、一番少ない時は3名しかおらず、必然的にとても

ない数のアンサンブルや吹奏楽、オーケストラの授業に参加することになり、大忙しな大学4年間でした。今思えば良い経験だったと思えるのですが、当時はゆっくりと自分のペースで練習したい…とよく思っていました。

♪ アットホームで温かい

私の札幌との出会いは大学卒業直後の2018年5月、札幌は何度かやらせていただいていたのですが、いわゆるプロオケでの仕事は札幌が人生で初めて。人生初プロオケということ

何よりも深くて温かい音色に魅了されて



©K.Seki

プロフィール

洗足学園音楽大学卒業。同時に優秀賞を受賞。同大学卒業演奏会に出演。第35回日本管打楽器コンクール入選。明治安田クオリティオブライフ奨学生に認定される。2015年2016年京都国際音楽学生フェスティバルに参加。小澤征爾音楽塾オペラプロジェクトXVIに参加。2018年セイジ・オザワ松本フェスティバル OMF 室内楽勉強会に参加。Randall Hawes、Paul Milner 各氏のプライベートレッスン、Matyas Veer 氏のマスタークラスを受講。これまでにバスロンボーンを故・秋山鴻市、野々下興一、黒金寛行の各氏に師事。2020年11月1日付で札幌交響楽団入団。



小学校入りたてで
まだトロンボーンを始める前の頃 遊園地で



OMF室内楽勉強会の演奏会で(写真中央)

©山田毅

2018年5月札幌フラス

指揮は川瀬賢太郎



もありガチガチに緊張していたのですが、セクションをはじめ前任バストロンボン奏者である野口隆信さんや他のセクションの方が本当に温かく接してくださり、こんな素敵な職場で働けたらなあと思ったことを今でも覚えています。

その印象は入団して4年目に突入した今でも健在で、本当にアットホームで温かいオーケストラだなと感じています。音楽面では北海道の空気感と調和した澄んだ音色が札幌ならではの良さだと個人的に感じています。

これまでで一番印象深い演奏会は昨年3月の第643回定期演奏会です。この演奏会ではフルート奏者の工藤重典氏をお迎えしてニールセンのフルート協奏曲を演奏したのですが、この曲で使われている金管楽器はホルンとバストロンボンのみ。ただでさえ普段ではほぼ考えられないアウエイな編成である上に、曲中にはフルート、ティンパニー、バストロンボンの3楽器によるソロもあり、とても刺激的な演奏会でした。

今後はこれまで大きな編成の曲をあまり札幌では演奏する機会がなかったので、マーラーの交響曲第2番「復活」などの大編成の曲を札幌で演奏してみたいです。

練習時間は日によってバラバラです。気分

が乗らないときはマウスピースを吹くだけで終える日もあれば、やる気に満ち溢れていて朝から晩まで自宅の練習室に籠ってひたすら練習する日もあります(ごくごく稀ですが)

♪ 道の駅巡りで北海道の虜

趣味や特技はこれと言って挙げられるものが見つからないのです

が、ドライブをすることが好きで特に北海道に来てからは道の駅巡りにはまっています(冬季

2022年3月第643回

定期演奏会 ニールセンの
演奏後 拍手をいただく



は休止中です。

北海道はやはりとても寒いですが、雪道での運転は何度か命の危機を感じました…。ですが、海鮮や野菜など美味しい食べ物にあふれているので既に北海道の虜になっております。

札幌くらぶの活動に対しては感謝しかございません。譜面隠しのバインダーなど札幌くらぶからの寄贈品を目にする度に、応援して頂いていることを再認識して温かい気持ちになっています。

会報もいつもよく読んでいます。曲目の解説や奏者以外からの視点での曲の解釈の仕方など、とても勉強になるので毎号楽しみにしています。

最後になりますが、札幌くらぶ会員の皆様、いつも応援していただき、そして支えていただきありがとうございます。定期会員の方や札幌くらぶ会員の皆様のご支援があってこそ私たちの活動だと感じております。一杯の音楽をお届けすることで日頃からの恩返しできればと思っていますので、今後とも札幌を宜しくお願い致します。

札幌の仲間とコンチェルトできる幸せ

まずは、ご来場いただいたお客様、本当にありがとうございます！ 舞台上に立った時まず一番に感激したのは、客席いっぱいのお客様でした。

今回のコンチェルトにあたって周りのオケマンの方から、「自分のいるオケの仲間とコンチェルトできるのは本当に幸せなことだよ」と声をかけていただいたのですが、その意味がリハサルから本番までの3日間よく分かりました。皆さんあたたかく応援してくれたからこそ、この大舞台を乗り切ることができたと心から思っています。本番中も札幌の皆さんの音が背中を押してくれました。

チェルトに慣れていない私たちを明るく励まし、支えてくださいました。この演奏会は学生の頃からいつか絶対に出演したい！と思っていましたが、札幌に入ってから3年目になるこのタイミングで出られたことで、オケでの経験を活かして演奏できました。お客様から楽しかった、フルートっていいね、と声をかけていただいたのが本当に嬉しくて、演奏して良かったと思えました。

正直とてもプレッシャーもあって、さゆらちゃんに「ここ数日悪夢ばかり見る」と話したところ大変共感してくれました。さゆらちゃんのメンコンも素晴らしいですね。一緒に出られてとても心強かったです！

ソリストの経験は、オケの中でも大変役に立つと思いますし、私にとってかけがえのないものとなりました。そしていつも応援してください皆様には演奏で恩返しをしていきたいです。

札幌交響楽団

フルート奏者

福島さゆり



フルート・福島さゆり
(写真協力 札幌交響楽団)

昨年の印象に残った札幌演奏会

コロナ禍から徐々に回復の兆しが見え始めたころ、ロシアによるウクライナ侵攻が勃発し、またしても重苦しい空気が漂いました。それをきっかけにしてロシア音楽を排除する動きが拡散しましたが、すぐにその過ちに気づき、ウクライナとロシアの芸術文化の奥深さを知らされました。このような時に行われた札幌の演奏会には、印象に残るものがいくつも有りました。

まずは第648回定期演奏会、札幌合唱団が3年ぶりの定期出演となった、ハイドンの「戦時のミサ」です。久しぶりの合唱の清楚な響きを聴きながら平和を祈願しましたが、プログラム決定当初には考えられなかったウクライナ侵攻という事態は無念でなりません。

11月の名曲コンサート「日曜日の宗利音（シニョリヒト）」は全曲ロシア音楽で綴られました。懐かしい旋律を聴いて、ロシアと北海道とのこれまでのつながりについて考えさせられました。

そして注目の第649回の定期演奏会はヴァイオリンのムロヴァとの共演です。旧ソ連か

ヴァイオリンムロヴァ
指揮گرانディ



(写真協力 札幌交響楽団)

ら亡命した翌年に来札してから、38年ぶりの共演となりました。演奏されたショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番は、旧ソ連時代の暗い陰を感じる技巧的な曲です。オーケストラは重苦しく這うような音で始まり、そこから湧きあがる独奏ヴァイオリンは恐ろしいほど美しく清らかに輝いていました。大音響と鮮烈な音の明暗は悲喜と恐怖を感じさせ、今現実にかけている戦禍と重なり、心に刺さりました。

他に印象に残った演奏会は秋の3連休に行われた、楽員さんによるリサイタルやアンサンブルでした。

第一回聖子さん弦楽四重奏団演奏会ー発車オーライ！
「モーツァルトを探して」

9月23日（秋分の日）奥井理ギヤラリーで、札幌を拠点に活動されている演奏家と札幌の楽員さんがコラボした、ユニークな演奏会がありました。第1ヴァイオリン山本聖子さん（道教大非常勤講師）、第2ヴァイオリン佐々木聖子さん（フリー）、ヴァイオラ荒木聖子さん（札幌）と、チェロにご主人の荒木均さん（札幌）が加わった聖子3+1

の弦楽四重奏団で、ハイドンの弦楽四重奏曲「日の出」などが演奏されました。アットホームな雰囲気と熟練のアンサンブルによる微笑ましい演奏会でした。

石川祐支&大平由美子
デュオリサイタル

9月24日はキタラ小ホールで、札幌首席チェロ奏者の石川祐支さんとピアノの石川由美子さんによるデュオリサイタルを聴きました。メインのフランクのチェロ・ソナタは、チェ

ロとピアノが一体感なくして成り立たない至難の名曲ですが、チェロは朗々と歌い、ピアノが寄り添うように対話し、格調高い演奏に魅了されました。

佐藤友紀×鶴田麻記×下田望
トランプットとピアノによる
アフタヌーンコンサート

3連休最後の9月25日は、六花亭ふきのとうホールで、札幌副首席トランプット奏者の鶴田麻記さんと、佐藤友紀さん（東響首席）、下田望さん（ピ

アノと、ゲストの松田次史さん（元札幌副首席）による演奏を聴きました。鶴田さんが演奏したバツハのコーラル集は、澄み渡った青空のように明るく柔らかな音で、「ラッパを吹く天使」を想わせました。また武満徹の「径（みち）」では、ミユートの着脱を繰り返して演奏され、それによって生じた繊細で広大な響きには宇宙を感じました。鶴田さんと師匠二人による、清々しいコンサートでした。

会員／高木誠一

楽譜支援金で購入した楽譜について

◎ファリヤ：スペインの庭の夜

前回の演奏時（1988年）までは、ファリヤは1946年没の作曲家であったため著作権の関係上、楽譜をBoschig社からレンタルする必要があったのですが、今回はすでに作品の著作権が消滅していますので、楽譜を購入することにしました。リプリント版というオリジナルの出版社（Schubert）と全く同じものです。薬でジェネリック医薬品というものがありますが、リプリント版の楽譜はそれと似たようなものかもしれません。

◎エルガー：チェロ協奏曲

この曲は、長らくNovello社のリプリント版の楽譜を使っていますが、今回ソリストの方が近年新しく出版されたBarenreiter版の楽譜をお使いになるということでしたので、オーケストラの楽譜もBarenreiter版を購入することにしました。最近、エニグマ変奏曲や弦楽セレナーデなどのエルガー作品もBarenreiter版で演奏しており、エルガーといえはNovelloという時代から今後変わりつつあるかもしれません。

◎マーラー：交響曲第7番

今回はKUBITZ版というマーラー協会による批判校訂版をレンタルします。マーラーは1911年没ですので作品自体に著作権はないのですが、マーラー協会による新たな校訂版の楽譜はレンタルでしか演奏できないためです。マーラーの楽譜の従来のは安価で購入できるのですが、最新の校訂版とは相違点が非常に多く、それを使うことは現在ではまずありません。

札幌交響楽団

ライブラリアン

中村大志

2022年度 札幌くらぶ楽譜支援金 支出内訳

作曲家	曲名	楽譜代	備考
1	ファリヤ	スペインの庭の夜	63,470円 2023/9 定期
2	エルガー	チェロ協奏曲	90,915円 2024/2 定期
3	マーラー	交響曲第7番	379,335円 2023/11 定期
	合計	533,720円	

札幌芸術賞受賞 大平由美子さん 札幌文化奨励賞受賞 北海道作曲家協会

昨年の12月16日、「札幌芸術賞」と「札幌文化奨励賞」の受賞者が発表されました。「札幌芸術賞」にはピアニストの大平由美子さんが、「札幌文化奨励賞」には団体として北海道作曲家協会が受賞されました。

大平由美子さんも、北海道作曲家協会の会長を務める八木幸三さんも「札幌くらぶ」の会員です。八木さんには長年「札幌くらぶ」顧問をお願いしているところですが、「ここにお二人の喜びの声と受賞理由を掲載するとともに、「札幌くらぶ」としてお祝い申し上げます。

札幌芸術賞

大平由美子さん



大平由美子さんのことば

この度は、札幌芸術賞を頂き、誠に光栄に存じます。たくさんの方々に支えて頂き今日まで音楽活動を続けてくる事が出来、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも私なりに音楽の素晴らしさをお伝え出来る様、精進致します。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

受賞理由

ピアニストとして、精力的に演奏活動を行い、その精緻な演奏技術と豊かな表現力により、聴衆に感動を与え続けてきた。また、ベルリン芸術大学講師時代のみならず、現在も勉強会や公開講座を行うなど、後進の指導・育成にも尽力し、本市の文化芸術の振興に大きく貢献している。

八木幸三会長のことば

当会は創立から16年を経て、多くの会員作品を通して皆様と心の交流をはかってまいりました。

このような名譽ある賞を頂き、これまでの活動が認められたことに喜びを感じています。

札幌くらぶの皆様にも良い作品をお届けできるように会員一同精進してまいります。

札幌文化奨励賞 北海道作曲家協会



受賞理由

作曲活動を通して北海道内外の音楽文化に貢献することを目的として平成19年に創設された作曲家団体で、幅広い年代・様々な分野の作曲家たちによる作曲や編曲活動を通じて、多様な音楽ニーズに応えている。また、協会主催の活動のみならず、諸団体との連携活動を積極的に行うなど、本市の文化振興に大きく貢献しており、奨励に値する。

新進演奏家育成プロジェクトの さゆりさんとさゆりさん

1月29日(日)の「新進演奏家育成プロジェクト」。

今回はわが札幌から二人の奏者が出演した。赤間さゆりさんと福島さゆりさん。会報99号にも「さゆりとさゆりで頑張ります」との福島さんの言葉もあった。聴きのがすわけにはいかない。いつもはPブロックの最前列が私の指定席なのだが、この日は全席自由席だったこともあって、ステージ前の最前列を目ざした。ところが、開演30分前に入場したのに「かぶりつき」はすでに埋まっていた。

短いティンパニに誘われて始まったメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲。聞こえてきた音は赤間さんの楽器から直接出たものであった。「何をいませら」と言われそうであるが、「いま目の前で本当に楽器が鳴っている」という感じが強かったのである。考えてみると普段我々は知らず知らずのうちに、大ホールなどでは特に、何かに反響した音やブレンドされた音を聴いているのではないだろうか。この日は「生演奏の中で生の音」を聴いたような気がした。

イベールのフルート協奏曲。久しぶりに聴いたが、第3楽章は聞き覚えがあった。というか、あの特徴的なリズムは一度聴いたら忘れられない。福島さんの演奏も第3楽章がすばらしかった。特に高音域がきれいに、のびやかに鳴っていたのが印象に残った。第3楽章にはソロが散りばめられていて、何度も引きつけられたのだが、どれも短か目で、もう少し聴きたいという衝動にかられた。



この日、福島さんのフルートは光り輝いていた。楽器自体もそして演奏も。

会員/村山英朗

ヴァイオリン・赤間さゆり
指揮・現田茂夫
(写真協力 札幌交響楽団)

イタリア気質の極みを示す

ふたつのオペラ

○歌劇「トロヴァトーレ」(ヴェルディ)
 イ・エットーレ・バステリアーニ
 ニニ・トゥリオ・セラフィン指揮
 ミリノ・スカラ座管弦楽団他
 (62年録音)



1963年秋、NHK招聘第4次イタリア歌劇団来日公演のテレビ中継は15歳の少年をイ

タリア・オペラの泥沼に引きずりこむ決定的瞬間を提供してくれた。輝くばかりの音楽の推進力と次から次へとあふれ出る旋律の数々、ヴェルディ中期の傑作・歌劇「トロヴァトーレ」によって僕はもうひとつの未知の世界をさすらいことになった。加えて、ノブール・バリトン、エトローレ・バステリアーニの圧倒的存在感。カンタービレのきわめて美しい朗々たる歌唱とニヒルな雰囲気染まる舞台空間は、半世紀以上を経過した今も僕の脳裏に焼きついて離れない。空前絶後の出会いであった。そんなバステリアーニが、

ほぼ時を同じくして、彼の仲間たちとこの作品のスタジオ録音を遺してくれた。弛緩とは無縁の職人的手綱でこの音楽劇を引き締めるセラフィンのもと、オール・イタリア人による歌の饗宴がまぶしいまでに聴く者に迫る。アントニエッタ・ステララ(レオノーラ)、カルロ・ベルゴンツィ(マンリーコ)など多くの出演者が高度な完成度を示しているが、中でも若き日のフィオレンツァ・コッソット(アズチエーナ)とバステリアーニ(ルーナ伯爵)が庄巻の歌唱を披露している。特に後者が歌う「君の微笑み」のアリアはイタリア・オペラ最高峰の歌唱として永遠に存在を主張するであろう。肉体の限界を駆使する声量と、気品あふれるカンタービレがこのディスクの価値を不動のものとしている。

「魔笛」(モーツァルト)や「ぼらの騎士」(R・シユトブラウスのドイツ・オペラとは異なる方法論で展開されるイタリアの歌劇、天折した不世出のバリトン歌手バステリアーニと出会ったがために、それから半世紀以上のあいだ僕はこの世界をさすらいことになったのだ。

○歌劇「道化師」(レオンカヴァル

ロ・マリオ・デル・モナコ)
 ジュゼッペ・モレルリ指揮
 NHK交響楽団他
 (61年収録DVD)



る。「黄金のトランペット」と称される、とどろきわたる銅(はがね)のような声に加え、むき出しの感情を舞台上でたたきつける演技のすさまじさ、リアリティはこれこそヴェリズモ・オペラの真骨頂であろう。かつてクレージャー・キャッツの桜井センリ氏が言っていたように、僕たちは歌手としてだけではなく、役者としても超一流のパフォーマン

ンスが楽しめるのである。登場人物の役柄に魂を注ぎ込んだ、尋常さを超えた目の表情、目の配りが僕たちの背中に何度も電流を走らせる。アリア『衣装をつ

ける』のすさまじさ、こんな歌手は後にも先にも存在しない。田舎まわりの旅芸人一座をめぐる、たった一晚の愛憎劇を熱っぽくまとめたこのドラマ、ライト・モ

長い間ありがとうございました
 チェロ奏者 坪田亮さん



26年間大変お世話になりました。
 これからも札幌と優秀な演奏家達への応援
 よろしくお願いたします。

2022年12月31日退団

もう語りつくされた、伝説の名演である。僕がこの映像に接したのは、1960年代半ばの高校生の時だった。第3次イタリア・オペラ来日公演の再放送番組(NHK)であったと記憶している。その映像がそのまま商品化されたのだ。
 主役のカニオを歌う、マリオ・デル・モナコの爆発的インパクトにとにかくにも圧倒され

チーフともいえる「愛の調べ」が時にはうづるに、時には扇情的に、時には甘く全編をうるおすが、モナコの鬼気迫る立ち回りに導かれてドラマは一直線に大詰めのカタストロフに駆け抜ける。ネッダ役のガブリエラ・トゥッチもカニオを歌うアルド・プロッティも立派に務めているものの、これはモナコあ

カニオによって発せられる「ラ・コメディア、エッフィニータ」(喜劇は終わりました)の最後のセリフが虚無的な余韻をのこす。
 血の気あふれるヴェリズモ・オペラの醍醐味ここにあり。

会員/村岡範男

スタッフの声

▼ある男性歌手のコンサートに行った。久しぶりに聴ける生の音に感動。「帰って来ました」と涙声での挨拶。私もうるうる。懐かしい曲と歌声。自然と体がリズムを取っていた。これからは機会があれば元氣をもらいにコンサートに行こうと思う。(橋)

▼11月の定期演奏会は入院のため聴くことが出来なかった。無事退院したもののこんなに足腰が弱っていたとびっくりする。年は取りたくないと思う。札幌の定期演奏会は心の糧である。地下鉄を降りてキタラまで歩く道のりを想像しながら鍛えよう。(西川)